

## ジョン・デューイの中等教育観

松下晴彦\*

- 1 デューイとハイスクール
- 2 世紀転換期の社会的状況と中等教育
- 3 中等教育における二元論の克服：学科目 (study) の捉え方
- 4 デューイの中等教育カリキュラム

### 1 デューイとハイスクール

ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) の長い生涯のうち、彼がハイスクール・レベルの教育実践・研究に直接関わった主な時期として、次の三つをあげる (分類する) ことができる。

第一は、1879年から1882年にかけてであり、デューイは、ペンシルヴァニアのオイル・シティのハイスクール (ラテン語、理科、代数学を教えている)、および故郷バーリントンの近く、シャーロットの村落学校 (Lake View Seminary、生徒は農家出身の13歳から20歳で30人から35人ほど) の教壇に立っている。

第二は、いわゆるミシガン大学時代である (1884-1894年、途中1889年にミネソタ大学の哲学教授を務めている)。ミシガン大学は、デューイが初めて大学における職を得た機関であるが、彼は哲学講師として、師のG. S. モリス (George Sylvester Morris) とともに哲学科のカリキュラムの再編成を手がけている。若き日のデューイは、哲学と生理学、心理学、倫理学のさまざまな要素をひとつの理論へと統合しようと格闘し始めており、これがやがて教育学へと展開する。しかし、この時期のデューイと中等教育の諸問題との接点はより实际的で直接的であった。ミシガン大学は、デューイが着任するよりかなり前、1871年より、認定を受けたハイスクール (accredited high school) の生徒を、入学試験にかえてその卒業資格で入学を許可するという方式、いわゆるミシガン・プラン (The Michigan Plan) を実施していた。この入学資格認定システムには、大学側がハイスクールを訪問し、その教育プログラムと実践について調査、観察をし、卒業時の学力の到達度が、大学の入学に際し、補習なしに充分であるかどうかを判断するという作業が伴っていた。そし

---

\* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

て、現存する資料によれば、ミシガン大学時代のデューイは、調査委員として少なくとも計8回のハイスクールへの調査団に加わっていることが知られているのである<sup>1</sup>。さらに1886年、デューイは、高大接続 (articulation) の問題の論議から発展したミシガン州学校長会 (the Michigan Schoolmaster's Club) の設立に関わっている。この設立メンバーには、大学の教員、ミシガン師範学校の教員、ハイスクールの教員、視学官などが含まれていた。最初の会合で、デューイは「大学からみたハイスクールにおける心理学」<sup>2</sup>というタイトルで講演をしているが、ここには、デューイによる中等教育とポスト中等教育との接続の問題、また中等教育のカリキュラムへの関心が現れている。尚、1887年と88年、デューイはミシガン州学校長会の副会長を務めている。

第三は、シカゴ時代である。シカゴ大学附属のいわゆるデューイ実験学校 (the Laboratory School) は1896年に教師2名、生徒は15名という規模でスタートしたが、1902年には、教師23名と数名のアシスタント、生徒140名という規模に拡大していた。翌1903年は重要な年であった。ひとつにはデューイスクールの在校生が中等教育段階に達していたことであり、他の一つは、(パーカー・スクールなどの初等学校に加えて) 中等教育レベルのシカゴ手工業学校 (the Chicago Manual Training School) とサウス・サイド・アカデミー (the South Side Academy) が教育学部 (School of Education) へ再編されたことである。これらを統括する立場にあったデューイは、初等教育に続いて、中等教育の意義と目的、カリキュラム・デザインと教育方法など教育実践をてがけるはずであった。ところが、歴史はそのようには展開しなかった。周知のとおり、人事と運営に関するトラブルから、デューイはシカゴを去ることとなり、彼の中等教育実践は実現されることはなかったのである。しかし、中等教育が直面していた独特の問題の性質とその淵源の分析には、かなりのエネルギーが注がれたことがいくつかの論文から知ることができる。本稿では、デューイの中等教育観について、歴史的社会的状況分析、中等教育のカリキュラム改革における学科目 (study) の捉え方、学問的 (自由) 教育と職業教育という二元論に対するデューイの捉え方とデューイの提唱するカリキュラム案などから考察していくことにする。

## 2 世紀転換期の社会的状況と中等教育

シカゴ時代のデューイによる中等教育構想は、意外にも早い段階で提示されている。すなわち、実験学校の初年次の終わりの報告書における、中等教育への言及である。それによると、「中等教育の業務はまだ実施されていないが、その主な目的は、多様な学科目群 (groups of study) を組織的に示差化 (differentiation) することによって、個々の生徒が、人類の到達したあらゆる領域へ調和の取れた参画を果たすことができ、また実生活において、あるいは上級の研究において専門化 (specialization) をはかることができるような、生徒の興味と能力に基づく特定化した方向性をもった知識を獲得できるようになることである」<sup>3</sup>と述べている。続いて、中等教育の期間は、実際のところ大学の2学年にまで及ぶ (べき) ものであるが、大学附属の学校はその最初の3年間に関わる (ことになる)、またこの中等教育期間は、様々な学科目 (study) の系列を学ぶ上で基礎的で主要な諸原理を、一般化 (generalizations) された形で形成する時期であり、さらに一般的諸原理を具体化し、説明できるような詳細な情報 (知識) を蓄積、収集する時期である<sup>4</sup>としている。そして、このような「一般化」と「特殊で詳細な知識」を短期間で習得できるようになるのも、(そ

れに先立つ) 初等教育での経験(あらゆる方向への能動的経験と知的欲求の持続)にかかっていると強調されている。

初等教育段階で獲得した直接経験は、次第に探究としての探究という性格を色濃くし、中等教育段階に至って、間接的経験や知識が質的にも量的にも豊かになると同時に、学習すべき領域(学科目)も次第に専門分化してくることになる。他方、学科目間の統合と相関をどのようにデザインするかが、カリキュラム構成原理として重要な問題となる。デューイは、中等教育原理を、専門化と一般化の二大原理で捉えていたのである。

それでは、デューイがこのような原理で捉えようと構想するに至った背景には、何があったのであろうか。有名な『学校と社会』の冒頭には、「全ての変化を覆い隠すほどの変化、産業上の変化」に言及されている箇所がある。この「変化」とは、科学の応用によるもので、自然の力を大規模で安価に利用できるような発明を生み、また生産の対象として世界規模の市場が発展し、この市場に物資を供給するための製造工場のセンターが発達し、この一大市場の諸部分の間では安価で敏速な流通と配送の手段が発展してきたことだと述べられる。このような「急激な社会変化」において、人々は都市へ集中し、生活習慣も驚くべき速さで変更を余儀なくされる。自然の真理への探究は、際限なく刺激され、その生活への応用は、実用的ばかりではなく商業的にも成り立つことが要請される。そして、私たちの人間の本性に奥深く内在するがゆえに最も保守的だと思われた道徳的、宗教的な観念や関心さえもが、深刻な意味において影響を受けているのである。このような変革(revolution)が形式や表面ばかりではなく何か本質的な部分において、教育に影響を及ぼしてはならないなどとは考えられないことである<sup>5</sup>と指摘している。

こうして、当時、教育の方法とカリキュラムに進行中の変革(modification)も、商工業のそれと同様に、変化した社会状況の所産であり、また当時、形成されつつあった新しい社会のニーズに応えようという努力<sup>6</sup>だと捉えることができる。しかしながら、デューイは、教育的状況に起こっている変化は、ある種の「混乱」であると考えた。

デューイは、新しい学科目(study)がカリキュラムに導入されるとき典型的な状況(この場合は、小学校)を描いてみせる。先ず、自分の街の学校は時代遅れなのではないかと感じる者が現れる。他の学校では革新的な教育が行われているという噂も囁かれ始める。やがて問題提起され、新聞などメディアで取り上げられ、ついに教育委員会は、然るべき日までに、何らかの新しい領域、自然研究、製図、料理、手工などが公立学校で教えられることになろうと決定する。ところが実際に導入後、1年経って、あるいは1ヶ月あまりであっても、子どもたちがかつてのようには満足に読み書き算ができない、これでは上級学年、ハイスクールで求められることもできないばかりか、ビジネス・仕事に就く準備もできていないのではないかという声が上がりはじめ<sup>7</sup>という具合である。

このようなカリキュラム変更への典型的な圧力とプロセスにおいては、個々の領域や科目がそれぞれ互いに関連のないものとみなされ断片的に遂行されている。そこには統一的な原理や哲学が存在するのである。デューイの考えでは、対立や混乱は、新しい解決への突破口として利用されるのであれば、それ自体は必ずしも悪いことではない。しかし、より秩序だった手続きに訴えるためには、まずカリキュラムの変更への圧力の源となっている社会的変化を省察し、しかる後にその反省に基

づいた立案における問題の立て方についても慎重に吟味することが不可欠なのである。

### 3 中等教育における二元論の克服：学科目（study）の捉え方

1902年、デューイは「中等教育における今日の諸問題」というタイトルの論文を発表している。この論文は、「シカゴ大学附属・連携アカデミック・ハイスクール会議」で提示されたものであるが、冒頭で当時、中等教育が直面している諸問題を整理することから始める。デューイは次のように分類している<sup>8</sup>。すなわち、（1）教育システムにおける中等学校（secondary school）の接続に関する問題、（2）大学進学準備と他の社会生活準備との調整に関わる諸問題、（3）個人に対する学校の学習の調整、（4）中等学校の学習課題の社会的側面から生じる諸問題、（5）カリキュラムに実質的に影響をもつ新たに発生している諸問題（学科目間、学科目群の間の対立）である。これらの問題に直面したときの人々の反応は次の二様に分類される。すなわち、改革は既存の伝統的な枠組みの中で行われるべきだと主張するグループと、学校を現代的社会的ニーズに応えさせるべくよりラディカルな変革を主張するグループである<sup>9</sup>。デューイは双方の立場とも見逃すことのできない重要な価値観を表していると言及するが、中等学校が置かれている真の問題は別にあるとしてその分析を提示してみせる。

中等学校の問題を語る上で、初等学校と大学とのそれぞれの接続の問題を無視することはできない。中等教育に固有の難題と使命は、その中間的・媒介的な位置に由来するものであり、中等教育は、歴史的にも様々な伝統からの諸勢力が交差する中心にあった。デューイは、一般的にも歴史的にも学校システムには、伝統的な諸力、つまり社会の利害や階級からの諸力が反映するものだと捉える。18世紀と19世紀に起こった社会変動は、政治的平等と同様に知性と道徳の発達と機会への要求を導いてきた。ルソー（J. J. Rousseau）やホーレス・マン（Horace Mann）は、狭隘な功利的な目的に換えて、全人的な発達を促すような初等教育の変革を主張した改革論者であった。ハイスクールの拡張もこうした民主的要求から展開されたものであり、ハイスクールは、より高い次元の人間の尊厳を希求しようというコモンマンの欲求を実現可能とする機関であった。他方、ハイスクールはもうひとつの伝統、有識者階級のための高級な文化（教養）の伝統からも影響を受けてきた。特に大学は、従来、高度の学識の英知と啓発のデータベース的機関であり続けたのであり、この大学の高尚な学問領域へと進むための準備機関に、ハイスクールはその起源を有している。

このようにハイスクールは、これらの二つの伝統の要求の出会いの所産であるといえる。より多くの教育と訓練を求めめる大衆による民主的な要求と、高度な学識の伝統の価値を保持したいという要求とを同時にいかに折り合いをつけるかが、ハイスクールに固有の問題を形成してきたのだとデューイは捉えるのである。1890年代には、「大学への最善の準備はまた生活への最善の準備でもある」という楽観的な命題があったようであるが、デューイは、このようなスローガンに対しては問題そのものを曖昧にするという理由で、否定的であった。というのも、この命題では、人生への準備の基準（standard）を設定するのは、「大学への準備」なのか、それとも大学への十分な準備のための適切な規準（criteria）を与えるのは、「人生への準備」であるのかが判然としないからである<sup>10</sup>。つまり、ハイスクールのカリキュラムは、大学準備を優先してデザインしても、それがそのまま職業準備の生徒のニーズにもベストなことなのだと捉えるのか、あるいはハイスクールは総合的

な意味で人生への準備に総力を費やすべきで、大学側が選抜をすればよいという捉え方とのコンフリクトである。しかしながら、デューイは中等教育の問題をこのように整理するものの彼自身はこの問題に対する直接的で明確な解答を提示しているわけではない。

デューイは、世紀の転換期から20世紀初頭における教育の「混乱」のルーツについて、当時急激な変化を遂げていた社会的状況にあるとみていた。デューイが教育について論じ始めてからの30年間の間に、学校教育における科目 (subjects) は、学問的 (academic) 領域においても、技術・職業 (technical or vocational) 領域においても急増し続けていた。当時、一般的に、中等教育をめぐる問題は、学問的 (自由) 学科目と技術・職業的学科目との関連性の問題として論じられていた。この対立を克服する方法として、デューイは、教授や学習上の目的から、学科目の再編成を促す方法を提案している。より具体的に言えば、「受け入れられている、また一般的な現行の科目分類の価値は何なのか、つまり、ハイスクールや大学の学修案内にでてくるタイトルとしての科目の意味は何か」<sup>11</sup>という問の立て方である。歴史や地理学、代数学、植物学といった科目名称 (の呼び方) は、それによって指示される素材が、そのまま研究・学習のための自然な状況を提供しているのだという前提に基づいている。つまりそのような名称によって、何かしら固定したものと示唆されてしまうのである。この仮定に従うと、科目名称によってカバーされるはずの素材の方がとてつもなく膨大になったとき、結果は、科目の断片化と新たな科目の際限のない増設ということになる。

ある教育目的から特定の素材を組織立てる科目が新たに立ち上げられるという場合、確かに、それが知識の拡張によってもたらされるという場合もある。しかし、デューイは、実際のプロセスを慎重に吟味すれば、そこには学校教育のプログラムの立案者も見逃している重要な要素があると指摘する。知の専門化というのは、既存の専門領域や下位分野の間のクロス・レフェレンスや相互依存性、内的整合性を伴っているものなのである。こうした探究と研究のプロセスに対しては、往々にしてハイフンで結ばれた表示が施されてきた。例えば、天体物理学 (astro-physics)、生化学 (bio-chemistry)、地球物理学 (geo-physics)、生理学的心理学 (physiological-psychology)、物理化学 (physical chemistry) などである<sup>12</sup>。探究のタイプが、隣接した関連領域の概念や素材の利用を要請しているのである。ところが、教師が学科目を教える際には、研究者の仕事の特徴づける知的興奮を伴うような相互作用の意味合いは欠如したまま、素材 (教材) のみが生徒たちに提示されるのである。一般的に、既存の知識と知識の創造は相互依存の関係にある。ところが、学科目はというと、それぞれ孤立化され独立したものになってしまうのである。典型的な例は、数学である。数学の概念やプロセスが、物理学などに応用されることにほとんど参照されることはないまま、数学は、大抵の生徒にとってつまらない一連の操作とアドホックに仕組まれた記号と公式でしかない<sup>13</sup>ということになるのである。

さて中等教育のカリキュラムの主要問題、学問的 (自由) 学科目か職業的学科目かという対立について、デューイはどのように考えたのであろうか。彼は新たな技術革新による知の増大は好意的に見ていたし、生活における活動との関連においてこそ、真に人文的で自由な見通しを発展させる可能性があるかと捉えていた。そして職業的な学科目の研究・学習を通して (はじめて)、教養は多くの人にとって真に活力をもつことができると考えていたのである (但し、職能に関わる技能の単なる習得に限定される職業教育には反対していた。産業プロセスの基底にある諸原理を対象とする

ような一般的な訓練を提唱していた)。デューイにとっては、学問中心の学校(カリキュラム)が存在すべきか、あるいは専門職の学校が存在すべきかという問題ではなく、その名のプログラムによって何が、どのように教えられるかが問題であったのである。

#### 4 デューイの中等教育カリキュラム

デューイは、Antioch Collegeの学長、A. E. モーガン (Arthur E. Morgan) の言葉を借用しながら、科学とアートが職業に応用され、職業準備における(学問的な)学科目が、精神を解放し自由化する重要な手段であるという時代に、職業か教養(学問)かという伝統的な対立は、今日成り立たない。従って、両者の間を隔てていた伝統的教育的な障壁も急速に薄くなって行くだろうと述べている。デューイは、この観点が中等教育に適用されると、そこでのカリキュラムは、実用的、準職業的な(semi-vocational)なコース(授業科目群)が、学問的訓練や社会的・科学的見通し(見解)をその一部に取り込むようなもの(カリキュラム)となるだろうと述べている<sup>14</sup>。ここにはデューイのひとつの理想が提案されているが、現実には、多くの困難な課題があることも付け加えられている。すなわち、先ずこのような観点をもつ教員を見出すことは容易ではないこと、そして望ましい目的を遂行するための題材と活動を組織立て選択することは、かなりの労力と徹底した探究、慎重なテストを必要とするという問題である。デューイは(かなり譲歩した提案として)現実的に可能な方法として、実用コースの入門において、現代社会の特定の仕事(occupation)をとりあげ、次に様々な名称で呼ばれる職業と関連性をもつコースへと進むという(カリキュラムの)提案をしている。そして、中等学校の授業(コース)が(専ら)十分な技術的訓練について準備教育をするという考え方を放棄し、生徒には、社会の重要な仕事(occupation)についての科学的社会的可能性について展開することをその任務とするとき、中等教育のコース(カリキュラム)はよりレベルであると同時により真の意味で実践的なものとなるだろうと述べている<sup>15</sup>。

デューイの中等教育観は、今日の総合制に近いといえるが、基底にある原理においては独特のものがある。1902年の論文では、デューイは、ハイスクールを拡張し、商業的、手工的、審美的学科目(commercial, manual, and aesthetic studies)を導入することを提唱している。これらの学科目は、商業科・社会学、科学技術の訓練、美学・応用芸術のコースとも呼ばれている。彼は通常のハイスクールがこれらの学科目の導入をはかり拡張していくことの利点について、次のように指摘している。第一に、このカリキュラムによって、社会に見出されるあらゆる典型的な仕事(occupation)を認識し再現することができるようになり、また中等教育と生活との関係は自由で多面的な関係となり、またあらゆる学科目は新しい観点から見るようになる。第二に、大学が科学技術や商業への方向性をもっていることから、中等教育に独特な大学準備という問題をシンプルにすることができる。第三に、ハイスクールの拡張は、個人をより広い領域に触れさせることにより、個人を個人として適切に扱うこと、個人をその能力において十全にテストすることを可能にする。第四に、手工訓練と商業的学科目によって表される職業(callings)は、人間の生活にとって絶対不可欠なものである。それらは、大多数の人類のほとんどの永続的な仕事を可能にしているのである。また手工訓練と商業的学科目は、人類の重要で恒久的な諸興味を表すものとして、教育者が考慮すべき課題、本質的な尊厳を有している。それらの教育上の位置を否定することは、

物質的興味と精神的興味との分裂—これは教育が克服すべきものであるが—を社会の中に保持することになるのである<sup>16</sup>。

このように、デューイは、専門化され限定された職業 (callings) 教育観に陥ることなく、商業的、手工的、審美的学科目を広域において設定し、教養や学問をその一部に取り込むような総合的なカリキュラムを構想していたと思われる。一般的に、商業的、手工的、審美的学科目は、社会的状況からの要請として先ずは周延的に位置づけられ、正規の中等教育に対しては、後から導入され、補充され提供されるものと受けとめられがちである。しかしながら、デューイにおいては、それらはカリキュラムデザインの中心に位置し、全学科目を統合する機能を担っているのである。それらがカリキュラムにおいて果たす機能は、結局のところ、デューイが初等教育カリキュラムで中心に位置づけた仕事 (occupation) のそれとほぼ同義であることがわかる。デューイのいう仕事は、連続性をあらかず概念であって、あらゆる職業や職種、専門的な仕事や実業的な仕事、あらゆる種類の芸術的能力、専門的・科学的能力、さらには有能な市民としての能力を含む概念である。デューイの生涯において、シカゴの実験学校の後継としての中等教育での実践はついに実現するとはなかった。一般にデューイの仕事概念は、初等教育においては有効であるが、中等教育においては内外のさまざまな諸勢力とのコンフリクトから実施は困難であっただろうと指摘される。しかしながら、理論と実践、労働と閑暇、身体と精神、専門と教養、職業と学問などあらゆる二元論が容易に表面化し、対立、拮抗する中等教育のカリキュラムにおいてこそ、デューイの構想する二大原理、専門化と一般化、準職業的・専門的学科目による総合、そして何よりも仕事 (occupation) というアイデアが検証の俎上にのせられる (のせられるはずであった) のではないかと思われるのである。

#### 【註】

- 1 Brian A. Williams, *Thought and Action: John Dewey at the University of Michigan*, The Bentley Historical Library, the University of Michigan, 1998, p.31.
- 2 J. Dewey, "Psychology in High-Schools from the Standpoint of the College," *The Early Works 1882-1898*, Volume 1 1882-1888, Southern Illinois University Press, 1969, pp.81-89.
- 3 J. Dewey, "The University Elementary School: History and Character," *University Record*, Vol. 2, No.(May, 1897), in *Essays on School and Society 1899-1901*, The Middle Works, 1899-1924, Volume 1, Southern Illinois University Press, 1976, p.332. p.75, from Arthur G. Wirth, *John Dewey as Educator, His Design for Work in Education (1894-1904)*, John Willy & Sons, Inc., 1966, p.197.
- 4 Loc. cit.
- 5 J. Dewey, *The School and Society*, The Middle Works, 1899-1924, Volume 1, op. cit., pp.6-7.
- 6 Ibid., pp.5-6.
- 7 J. Dewey, "The Situation as Regards the Course of Study," *Educational Review*, Vol.22, 1901, pp.29-30.
- 8 J. Dewey, "Current Problems in Secondary Education," *School Review* 10,1902, in *The Middle Works, 1899-1924*, Volume 1, op. cit., pp.283-284.

- 9 Ibid., p.287.
- 10 Ibid., pp.290-91.
- 11 J. Dewey, "The Way Out of Educational Confusion," in *The Latter Works, 1925-1953, Vol. 6: 1931 – 1932*, Southern Illinois University Press, 1985, p.76.
- 12 Ibid., pp.79-80.
- 13 Ibid., p.80.
- 14 Ibid., p.85.
- 15 Loc. cit.
- 16 J. Dewey, "Current Problems in Secondary Education," *School Review* 10,1902, in *The Middle Works, 1899-1924, Volume 1, op. cit., pp.295-298*.

# John Dewey's ideas on Secondary Education

Matsushita, Haruhiko\*

The attempt in this paper is to further a realistic appraisal of Dewey's ideas on secondary education by creating an account based on his writings and other documents (printed speeches). For the most part, they concentrate on an analysis of the nature and origin of problems confronted by the high schools. Some general principles are outlined, but there is a total lack of detail.

In reviewing these neglected phases of Dewey's ideas, this paper examines three facets: Dewey's argument that the problems of secondary education were rooted in the social change and the industrial reorganization transforming American society, Dewey's analysis of the relations of liberal (academic) and technological studies, Dewey's recommendations for reorganizing studies at the secondary education.

Dewey rejected the idea that there was any single and easy answer for education in the new America. There was a possibility of developing a humanistic and liberal outlook in connection with the practical activities of life, and through vocational studies culture might be made truly vital for many people. The real issue was not whether professional schools should exist, but what the programs should contain and how they should be taught.

The paper concludes that through his analysis of the problems of secondary education Dewey returned to his concept of the occupations as educational centers for social insight.

---

\* Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University